⑦日ポ語関連

日本語研究に果たしたポルトガルの貢献（第3章pp54-60）

ポルトガル人が日本に来航していた時代物、カトリック教会では、テンポラス（temporas）と呼ばれる、肉食を避ける「小齋」と節食をする「大齋」（たいさい）を行う期間が年に四回定められていた（注30）。”temoras”はラテン語の”tempora”(“tempus“の複数形)に由来する。天正遣欧使節（1582-1590）に同行したイエズス会日本巡察使ヴァリニャーノは、彼らの紀行を記した「日本使節行記 Tratado dos Embaixadores Japoes que forao de Japao a Roma no Annno de 1582（注31）」第5章にて、四つのテンポラスに言及している。16世紀、日本にいたイエズス会などの宣教師たちも、この期間には大齋と小齋を守って肉の替わりに魚の揚げ物（peixe frito）を食べていたので、日本人はその魚の揚物を指して、テンプラと呼ぶようになったのかもしれない（注32）。また、「南蛮料理書」と題する南蛮料理の書物に「テンプラリ」という言葉があり、その料理の仕様が記載されているが、調理法は、今日の「テンプラ」即ち、海老などの魚介類、野菜に小麦粉と卵を付け油で揚げた伝統的な日本特有の料理とは全く別のものである（注33）。

最近では、テンプラという言葉は菓子用語にも取り入れられ、「バナナのテンプラ」や、「リンゴのテンプラ」などがある。

前述の料理書の中に「クシイト」と称される料理の説明があるが、岡田章雄教授は、これがおそらく、ポルトガルの煮込み料理コジード・ア・ポルトウゲーザ（cozido a portuguesa）からきたものとみる。この料理は、鶏・牛・猪・豚といった多種の肉と、各種野菜を材料に煮込んだもので、今日の日本には「鍋料理」は色々あっても、「クシイト」という料理にあたるものはない。

同書には、更に「ケサチヒナ」と呼ばれる菓子の製法も載っている。岡田教授は、この「ケサチヒナ」の原語をポルトガル語のqueijadaに求め、「カセイタ」という語に収められており、そこでは、梨実と砂糖にて作られたる南蛮菓子と説明されている（注34）。熊本市には今でも、同名の菓子がある。なお、長崎には「ケジャード」という菓子があった（注35）。

「ヒリョウス」という南蛮菓子の製法も、この南蛮料理書」の中に出てくるが、教授は、filhosというポルトガル語からできたもの、と推論する。その理由は、これが上しん粉（ポルトガルでは小麦粉）と卵を材料に、油で揚げて、砂糖をまぶして作られるという、ポルトガルの菓子（フィリョース）と同じ製法の菓子だからである。本来、「ヒリョウス」（あるいは「ヒリョウズ」）は、このように甘い菓子だったが、後年、これが、各種野菜を交ぜて油で揚げた一種のパイのような食品に変わった（注36）。

九州の大分市（ポルトガルのアヴェイロ市と姉妹都市）には今日でも、「ザビエル（Xavier）」「ボンディア(bon dia)」という名前のついた菓子がある。

このように、言葉の面におけるポルトガルの影響は多大なものがあり、ポルトガル語は、日本語の語彙に根を下ろしたが、多くの場合、後に、オランダ語の影響を受けて、これと結合したり混成したりした。近年になって、アメリカとの交流が始まると、英語から多数の日本語が入り、その結果、同源でありながら異なる数個の単語が生まれることになった。

例えば、「シスカウト」「ビスコクト」は、ポルトガル語のbiscouto若しくはbiscoitoからきているが、英語biscuitの影響で最近「ビスケット」になった（注37）。

同様に、ポルトガル語のcarameloを原語とする「カルメラ」「カルメイラ」という言葉も、英語caramelの影響で、「キャラメル」に変わったが、この場合には、言葉の意味にも変化が生じた（注38）。

語源的には同じ言葉同士でありながら、その意味が異なる、こうした外来語としては、他にも、ポルトガル語cristaoを原語とする「キリシタン（日本に初めて伝えられたカトリック教の信徒の意）」と、英語のchristian（キリスト教徒、クリスチャン）からきた「クリスチャン」。それにポルトガル語のcapa（外套。雨よけに着るマント）に由来する「カッパ（合羽）」と英語のcape（短い外套）からの「ケープ」のような例が挙げられる。

面白いのは、ポルトガル語のcartaを原語とするカルタ（「花カルタ」「いろはカルタ」「歌カルタ」として）という言葉である。日本語には、この「カルタ」と同源でありながら、意味は全く別の外来語が数個ある。医者が用いるドイツ語のKartaからの「カルテ（診断簿）」、英語cardからの「カード」、同じく英語credit cardからの「クレジット・カード」、それに「ア・ラ・カルト」（フランス語　a la carte）の「カルト（献立表）」などである。こうした外来語同士の結び付きの例は、日本語の持つ特性をよく表すもので、その特性とは、ひとつには外来語に対する開放性、そしていまひとつは、同語源にして語形、意味の異なる語を色々受容、契情する能力である（注39）。

ある外来語の原語がポルトガル語か、それともオランダ語か、実際はそのどちらの可能性もある、といった具合に、正確な原原語の決定は容易ではないことが多い。そしてこの際、とりわけ重要となるのは、その外来語がいつ頃初めて文献に現れたかということと、これに加えて、その言葉が出現を促した文化史的、また歴史的事実である。ポルトガル語系の語が後から入ってきた同音のオランダ語の影響を受けて、その用法が拡大、強化されたケースがしばしばあり、「コップ」という言葉なども、正しくこの例にあたる。「コップ」は、多分ポルトガル語のcopoからきたものと思われるが、同音のオランダ語kopにより、その用法が強化された。「カンテラ」という言葉も、原語はポルトガル語のcandeiaであろうが、後にオランダ語のkandelaarを経由したことは充分に考えられるところである。この他に興味深い言葉として「カピタン」があり、この語は、ポルトガル語のcapitaoが原語で、これがオランダ語のkapiteinを通って、近年、英語captainの影響から「キャプテン」に変わった。

日本語の語彙の中に占める英語の比重がますます大きくなっている今日、ポルトガル語からの外来語で生き残って今でも使われるものとなると、その数を正確に算定することは難しい。前に述べた語の他に、以下、少し擧げてみると、

ボーブラ　かぼちゃ（abobora）

アルヘイトウ　有平糖（alfeloa）

バンコ　長椅子、縁台（banco）

ボーロ　小さな丸い菓子（bolo）

ボタン　釦（botao）

カルサン　軽衫（calcao）

カステラ　(Castela)

コエンドロ（coentro）コリアンダー

コンペイトウ　金平糖　（confeito）

キリスト　基督（Cristo）

キリスト教　基督教（cristianismo）

ヨーロッパ　欧羅巴　（Europa）

フラスコ　（frasco）

ジュバン　襦袢（gibao）

イエス　（Jesus）

ジョーロ　如雨露（jorroまたはjarro）

メイヤス　(meias)

メリノ　(meirino)

ミサ　(missa) 英語ではマス、マース

オルガン　(orgao)

パン　（pao）

ラシャ　羅紗　(古いポルトガル語raxa)

ロザリオ　(rosario)

シャボン　(sabao)

タバコ　煙草　(tabaco)

テレビン油　(terebintina)

ビロード　(veludo)

ビードロ　（vidro） ガラス

などがある。

また今でも地方により、または年輩の人達に使われている「たんと召し上がれ」などの「たんと」はポルトガル語の”tanto”に由来すると思われる。

ポルトガルと日本の交流は、比較的短い期間（1543-1587）

であったが、この西欧と日本の初めての出会いから、日本文化の各面、とりわけ、言葉の面において、輝かしい成果が生まれ、その価値と効用は今日においても失われていない。我々は、以上、この簡単なリストからも、このように結論付けることが出来る。

この言語交流の間、様々な日本語がポルトガル語の語彙に入った。次にそれらの中から幾つかと、またその後ポルトガル語に加えられた言葉を、アルファベット順に擧げてみる。

banze (万歳)

biombo (屏風)

bonzo (坊主)

cabuqui (歌舞伎)

camicase, kamikaze (神風)

caquemono (掛け物)

caqui (柿)

carate, carate (空手)

carateca (空手家)

catana (刀)

その派生語catanada（刀で一撃を加えること）

daimio (大名)

\*その派生語　daimiado, daimiato (大名領地、大名職)

gueixa　（藝者）

haikai, haicai (俳諧)

haraquiri (切腹)

jiu-jitsu (柔術)

judo (柔道)　judoca　（柔道家）

micado (帝)

niponico (日本の、日本人の、日本人)

quimono （着物）

saque, saque (酒)

soja ［大豆（Shoyuより派生）］

tori (鳥居)

tsunami (津波)

xinto, xintoismo, sitoismo (神道)

\*その派生語　xintoista (神道信者)

xogum (将軍)

\*その派生語　xogunato (幕府)

また、その他の興味深い言葉として、椿の木はポルトガル語でjaponeira（Japon+eira日本の木）、椿の花は、一般にはcameliaと呼ばれるが、rosa-do-japao（日本のバラ）とも言う。